

「劉岱墓志銘」考

——南朝における婚姻と社会的階層——

中 村 圭 爾

はしがき

一 「劉岱墓志銘」

二 劉岱とその姻戚

は し が き

三 婚姻の階層的秩序

四 婚姻と政治的身分

五 貴族制と社会的階層秩序——むすびにかえて——

「文物」一九七七—六（総二五三期）所載の「劉岱墓志簡述」（鎮江市博物館、陸九皋執筆）は、新出の南齊「劉岱墓志銘」の簡単な紹介である。それによると、この墓志銘は、一九六九年に江蘇省句容縣袁巷公社小竜口から出土したもので、大きさは幅六五センチ、高さ五五センチ、厚さが七センチ、銘文字数は三六一個である。報告者もいうように、北朝にくらべて墓誌出土例のきわめてわずかな南朝にあって、これは南朝墓誌の貴重な一例であるのみならず、現在しられているかぎりの晋南朝墓誌と比較しても、その完整さ、文字の明晰さ、内容の貴重さ、そのいずれにおいても稀有のものであり、新出史料としてゆたかな価値をもつものといわねばならない。

「劉岱墓志銘」考 中村

第六十一卷 二八五

「簡述」の報告者は、この墓誌の概要を紹介したあと、墓誌の主である劉岱なる人物が「南齊書」^{卷三}王敬則伝中にみえる山陰令劉岱と同一であるとして、王敬則伝中の記事から当時の支配階層内部の政治的対立状態の一斑に言及し、また、墓誌銘文中に地名が二十数例みえることから、歴史地理学的考証を若干おこなっている。しかしながら、新出の貴重な歴史的史料としてのこの墓誌のもつ意味はこのような論点にとどまるものではけつしてない。それどころか、この墓誌銘の豊富な内容は、南朝史研究のさらにいくつかの論点にあたらしい素材を提供するものであるとおもわれる。ここでは、それら諸論点のひとつとして、とくに南朝における婚姻という問題についての新史料としてこの墓誌銘を検討してみたい。

南朝における婚姻は、私的・日常的営為以上の意味をもつ。従来、それはいわゆる貴族制の問題との関連のうで議論されてきた。その論点はおおまかにいって、三点ある。第一に、門閥体制形成における姻戚関係についてのものであり、第二に、「土庶不婚」——身分的内婚制——という身分制がからだ独自の婚姻のありかたについてのものであり、第三に、南北人不婚の問題であって、それらはいずれも南朝貴族制理解に不可欠の論点である。⁽²⁾本稿でとりあつかうのは、おもに右の第一・第二の論点であり、論をすすめる際に第三の論点にも若干の言及をおこなう。

さて、この第一の論点についていえば、門閥体制形成において、姻戚関係が世襲的官僚身分とともにとも重要な役割をはたしたことはすでに自明の論であり、門閥なるものを構成した有力諸氏族間の通婚状況を詳細に追求するようなこころみもなされている。⁽³⁾このような着実なこころみは、いわゆる貴族制の実態を解明するための有効

な一方法といえるであろうが、皇帝一族と最上層氏族に密で、下層階層になるほど疎であるという史料の制約上、従来の研究は皇帝家と王謝袁褚、あるいは顧陸朱張といった最上層氏族が閉鎖的な通婚集団を構成しているといった事実をあきらかにしえなすぎなかったようにおもわれる。たしかに、それ自体も貴族制におけるもっとも顕著な現象形態のひとつではあるけれども、体制としての貴族制を構想する場合、より下層の諸氏族間の通婚のありかたをも視野にふくむことが当然ともめられる。ほかならぬこの点において、「劉岱墓志銘」は貴重な素材たりるのであり、本稿がこれを取りあげる意図もここにある。

本稿は、この「劉岱墓志銘」の中の通婚関係記事を素材にして、いわば中流ともいえる諸氏族層の通婚のありかたを検討し、それにもとづいて貴族制下の特徴的な氏族の階層的秩序と、その体制における意味についての若干の知見を提示しようとしたところみである。

一 「劉岱墓志銘」

まず、「劉岱墓志銘」の全文を掲載しよう。

齊故監余抗^{アキ}劉府君墓志銘

高祖撫字士安彭城内史

夫人同郡孫荀公

後夫人高密孫女寢

「劉岱墓志銘」考

曾祖爽字子明山陰令 夫人下邳趙淑媛

祖仲道字仲道余姚令 夫人高平檀敬容

父粹之字季和太中大夫 夫人彭城曹慧姬

南徐州東莞郡莒郛都鄉長貴里劉岱字子高君齠年岐嶷弱歲明通孝敬篤友基性自然識量淹濟道韻非假山陰令泮太守事左遷尚書札白衣監余抗_ト郛春秋五十有四以永明五年太歲丁卯夏五月乙酉朔十六日庚子遘疾終于郛解粵其年秋九月癸未朔廿四日丙午始創塋塋于楊州丹揚郡勾容郛南鄉廩里竜窟山北記親銘德藏之墓右

悠悠海岳綿綿靈緒或秦或梁乍韋乍杜淵懿繼芳世盛龜組德方被今道廼流古積善空言仁壽茫昧清風日注英猷長晦寔設徒陳泉門幽曖敢書景行敬遺千載

夫人樂安博昌任女暉春秋五十有三以永明元年太歲癸亥夏五月己酉朔十三日辛酉終

父文季 祖仲章 一女 二庶男

女玉女適河東裴閔

長男希文 婦東海王茂瑛 父沉之 祖万喜 少男希武

この墓誌銘文を一瞥してただちに注目されるのは、銘文中に劉岱本人の生前の事跡をのべる部分がわずかなものでしかなく、頌徳の銘詞とならんで、高祖より子息におよぶ世系と通婚についての記事が相当の部分を占めているという現象である。このことは、諸氏族の家系と通婚關係に対する當時のなみなみな関心のたかさ、意識のつ

よさをおもわせる。

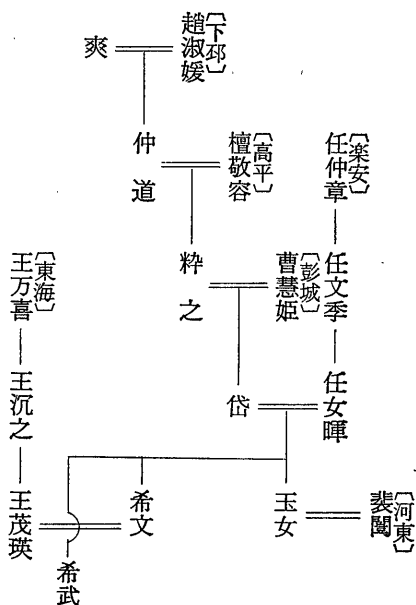
このような墓誌の様式は、実はひとりこの「劉岱墓志」にのみ特徴的にみえるものではない。残存する晋南朝の墓誌銘はかならずしも多数ではないが、それらのうちにも、家系と通婚関係を詳細にのべている例がみえるのである。そのもっとも代表的なものは「晋中書侍郎荀岳墓志」と「宋故散騎常侍護軍將軍臨澧侯劉使君墓志」であるが、このような墓誌銘がすくなく存在するのは、家系と通婚関係が当時に共通した社会的関心の重大な対象であったことをしめしているのである。

二 劉岱とその姻戚

まず墓誌にみえる劉岱を中心とした姻戚関係を
図示してみよう(上図)。

ここに、下邳趙氏、樂安任氏、高平檀氏、彭城曹氏、河東裴氏、東海王氏などが東莞劉氏、とくに劉岱系統の姻戚としてその族名があげられている。

文士任昉をだした樂安任氏、「三国志」注の裴松之、史記集解の裴駰父子をだした河東裴氏、元



(母子関係はかならずしも正確でない)

嘉二十七年の北魏の南侵という危機にあたって、宋文帝をしてそのすでになきことを嘆息させた宋初の重鎮檀道濟をうんだ高平檀氏、それぞれしたる名族ではないにしても、なお中堅どころの大姓としては代表的存在である。ところで、ここでとりわけ注目に価するとおもわれるのは、劉岱系統の姻戚であったそれら諸氏族のうち、そのあるものに相互の通婚関係があったことをしめす史料が断片的に存在することである。

裴氏と任氏

任昉、……父遙、齊中散大夫、……遙妻河東裴氏、

〔南史〕^{卷五}任昉伝

裴子野、……於（任）昉為從中表、

〔梁書〕^{卷三}裴子野伝

裴氏と檀氏

武穆裴皇后、……父璣之、左軍參軍、……后母檀氏、

〔南齊書〕^{卷二}皇后伝武穆裴皇后

高平檀氏は、東莞劉氏とおなじく、南渡して京口に居住していた〔宋書〕^{卷四}が、この一族はまた、やはり京口にいて宋武帝劉裕をだした彭城劉氏と密接な連姻関係にあった。

長沙王道憐妃、（檀）超祖姑也、

〔南齊書〕^{卷五}文学檀超伝

高平檀珪、……与（王）僧虔書曰、……僕一門、雖謝文通、乃忝武達、羣從姑叔、三嬖帝室（劉宋帝室のこと

——筆者）、

〔南齊書〕^{卷三}王僧虔伝

ところで、すでに矢野主税氏が詳細に検討しておられるように、劉宋帝室の通婚相手は、圧倒的多数をしめる琅邪王氏をはじめとして、陳郡謝氏、河南褚氏、廬江何氏、濟陽江氏など北来名門諸族に集中しているが、それらに

まじって、当時さほどの名門とはみとめがたいような氏族名の散見するのが注目される。下邳趙氏——宋武劉裕の母がこの一族であるが、劉岱系統の姻戚でもあることに留意せよ——、東莞臧氏などがそうであるが、とりわけ東海徐氏において、密接な連姻がみられる。〔補註〕

さて、この東海徐氏についていえば、「南齊書」卷四徐孝嗣伝に、

孝嗣姑適東莞劉舍、

とあるように、東莞劉氏と通婚関係をもっていたことがしられる。劉舍は、劉岱の一世代のちの族人である（第四節劉氏系図参照）。また、おなじく東海徐氏の一員である徐陵は母が臧氏——おそらく東莞臧氏——であり（「陳書」卷二本伝）、その弟徐孝克の妻も東莞臧氏であった（「陳書」卷二本伝）。東莞臧氏が前述のように劉宋帝室の通婚相手であったことは、あらためて留意をうながすまでもないであろう。

このようにみてみると、東莞劉氏の周辺において、劉宋帝室たる彭城劉氏をはじめ、東海徐氏、東莞臧氏、下邳趙氏、高平檀氏、河東裴氏、樂安任氏などのあいだに、連環にも似た通婚関係の存在することがあきらかとなってくる。〔註〕

ところが、一方で、この東海徐氏については、「梁書」卷三江革伝に、

僕射徐勉以權重自遇、在位者竝宿士敬之、惟革及王規与抗礼、不為之屈、勉因蒨門客翟景、為第七兒繇求蒨女婚、蒨不答、景再言之、乃杖景四十、由此与勉有忤、除散騎常侍、不拜、是時、勉又為子求蒨弟葦及王泰女、二人竝拒之、葦為吏部郎、坐杖曹中幹、免官、泰以疾仮出宅、乃遷散騎常侍、皆勉意也、

とあるように、当時顯貴の地位にいた徐勉が二度にわたり江蒨兄弟および王泰から通婚を拒絶されている。王泰はいうまでもなく南朝第一の名門琅邪王氏であるが、江蒨兄弟もまた有数の南渡の名門濟陽考城の江氏である。この通婚拒否が単なる権力者への名門出身者の反撥でないことは、「南史」^{卷六}徐勉伝に、

旧揚徐首迎主簿尽選國華、中正取勉子嶽充南徐選首、帝敕之曰、卿寒士、而子与王志子同迎、偃王以来、未之有也、

とあるように、この徐勉が梁武帝から名指しで寒士とよばれ、また琅邪王氏（王志）と比肩すべくもないことを公言されているということでもあきらかであるし、また、この江蒨の父江敷が、「南史」^{卷三}江敷伝に、

先是、中書舍人紀僧真幸於武帝、稍歷軍校、容表有士風、謂帝曰、臣小人、出自本県武吏、邀逢聖時、階榮至此、為児昏得荀昭光女、即時無復所須、唯就陛下乞作士大夫、帝曰、由江敷謝瀹、我不得措此意、可自詣之、僧真承旨、詣敷登榻、坐定、敷使命左右曰、移吾牀讓客、僧真喪氣而退、告武帝曰、士大夫故非天子所命、時人重敷風格、不為權倖降意、

とあるような逸話でしられるように、「士庶」という身分秩序にきわめて厳正な人物であり、かつ江氏が陳郡謝氏（謝瀹）ともどもそのような身分秩序の頂点に位置する名族であった⁽⁸⁾ということからも傍証しえよう。すなわち、このことは、本来濟陽江氏と東海徐氏がそれぞれその属する通婚集團を異にしていることをしめしているとみるこ
とができるのである。

さらに、この濟陽江氏については、「宋書」^{卷七}江湛伝に、

司空檀道濟為子求湛妹婚、不許、(彭城王) 義康有命、又不從、時人重其立志、

とあるように、宋朝創業期の権臣檀道濟との通婚を拒否したという事実がある。江湛は江敷の父、江蒨にとっては祖父にあたる。檀道濟がさきからのべてきたような劉岱の姻戚でもあり、劉宋帝室と密接な連姻関係にあった高平檀氏の一員であることはいうまでもない。この記事は、済陽江氏と高平檀氏がやはりそれぞれあい異なる通婚範囲をもっていたことをものがたっていると理解してよい。

以上に、通婚関係についての繁雑な考証をおこなったが、撮要すれば、琅邪王氏・済陽江氏が高平檀氏・東海徐氏と通婚範囲を異にすること、その高平檀氏・東海徐氏は劉宋帝室(彭城劉氏)・東莞劉氏・東莞臧氏・下邳趙氏・河東裴氏・樂安任氏などとのあいだで連環のごとく通婚関係をもつということの二点である。このことは、ここに通婚範囲を異にする二大氏族集団が存在しているということを積極的に推測せしめるものである。

このような特徴的な通婚のありかたのうち、相互に通婚関係をもつ諸族におけるその通婚の由来には、地縁的要素がすくなく作用していたであろうことを考慮しておく必要がある。たとえば、東莞・東海・下邳・彭城諸郡は今の山東省南部・江蘇省北部一帯にあって隣接しているし、高平檀氏・東莞劉氏・彭城劉氏(劉宋帝室)がともに京口に客寓していたことも既述の通りである。したがって、このような本貫と居住地をもつ諸氏族間に通婚がおこなわれたとしても、何ら奇異とするにたりないかもしれない。

しかしながら、この通婚範囲を共有する諸氏族のうちのあるものが、特定の、しかも一流とされる氏族から積極的な通婚拒否をうけているという事実は、おのずから問題をまたちがった様相のものとするであろう。劉岱とその

姻戚をふくむ通婚集団の形成は、かかる地理地縁的条件に由来するのではなく、また異なる契機によってなされたと理解するべきなのである。

三 婚姻の階層的秩序

すでに冒頭にのべたように、南朝における婚姻は、いわゆる貴族制との関連において、すぐれて政治的かつ社会的性格をもつ事象であるが、なかでもっとも周知の事実は、つとに仁井田陞氏の卓論であきらかにされている「土庶不婚」、すなわち身分的内婚制の慣行である。⁽⁹⁾ その見解の論拠は、「文選」^{卷四}「彈事」にひく沈休文（約）の「奏彈王源」という一文であるが、ここで沈約の彈劾の対象となつた王源こそは、奇しくも劉岱の姻戚である東海王氏の一員であり、かつ劉岱とはほぼ同世代にあたる人物である（第四節劉氏・王氏系図参照）。まず、この「文選」奏彈王源の要処を摘録すれば、およそつぎのようなものである。

給事黃門侍郎兼御史中丞吳興邑中正臣沈約稽首言、……風聞東海王源嫁女、与富陽滿氏、源雖人品庸陋、胄実參華、曾祖雅位登八命、祖少卿内侍帷幄、父璿升采儲闈、亦居清顯、源頻叨諸府戎禁、予班通徹、而託姻結好、唯利是求、玷辱流輩、莫斯為甚、源人身在遠、輒撰媒人劉嗣之、致台弁問、嗣之列称吳郡滿璋之相承云是高平旧族、寵奮胤胄、家計温足、見託為息鸞覓婚、王源見告窮尽、即索璋之簿閱、見璋之任王国侍郎、鸞又為王慈吳郡正閭主簿、源父子因共詳議、判与為婚、……竊尋璋之姓族、土庶莫弁、滿奮身殞西朝、胤嗣殄没、武秋之後、無聞東晉、其為虚託、不言自顯、王滿連姻、実駭物聽、……臣謹案、南郡丞王源忝藉世資、得參纓

晁、同人者貌、異人者心、以彼行媒、同之抱布、且非我族類、往哲格言、薰猶不雜、聞之前典、

その大要は、王雅の曾孫にあたる王源の子の婚姻相手となった吳郡富陽県の滿氏の士庶如何が明確でないので、この婚姻は王氏にとっては不当のものとなることである。仁井田氏の卓見によれば、これによって当時すくなくとも婚姻の範圍を別にする二大通婚集団が存在したことを確認することができる。それを、それぞれ「士」「庶」とよぶことも周知の事実である。

ところで、沈約はこの弾劾文のなかで、王氏——および沈氏みずからとも——とは婚姻の範圍を異にする滿氏を「わが族類にあらず」と表現しているが、このことは、「陳書」^{卷三}儒林王元規伝に、

王元規、字正範、太原晉陽人也、祖道宝、齊員外散騎常侍晉安郡守、父瑋、梁武陵王府中記室參軍、元規八歳而孤、兄弟三人、随母依舅氏往臨海郡、時年十二、郡土豪劉瓚者、資財巨万、以女妻之、元規母以其兄弟幼弱、欲結彊援、元規泣請曰、姻不失親、古人所重、豈得苟安異壤、輒婚非類、母感其言而止、

とあることを想起させる。このような類なる觀念は、一応は⁽¹⁰⁾社会的な二大階層としてある士庶の、とくに士の側における排他的な階層意識として理解することが妥当であろう。しかしながら、この士の同類意識は、婚姻において、現実には士階層全体を単一の通婚集団に統一してしまうものではなかった。「南史」^{卷八}賊臣侯景伝に、

(侯景)又請娶於王謝、(梁武)帝曰、王謝門高非偶、可於朱張以下訪之、

とあるのによれば、婚姻において、士階層に属するとされる諸氏族のあいだにも、格差が厳然として存在していたということがあきらかである。その格差は、王謝と朱張以下というように表現されているが、ここにいる王謝と朱

張とは「新唐書」^{卷九}儒學中柳沖伝所載の柳芳の論に、

過江則爲僑姓、王謝袁蕭爲大、東南則爲吳姓、朱張顧陸爲大、とあるものにあたるであろう。

南朝においては、南渡した中原諸族と江南土著の諸族、すなわち北人南人両者が並存し、とりわけ王謝を中心とする北人一流氏族のまえには、朱張顧陸といった南人有数の諸族でさえも、一段ひくい政治的社会的地位を甘受せざるをえなかったというのはよく知られた事実である。⁽¹⁾したがって、ここで通婚にあらわれた王謝と朱張以下という格差ないし上下の階層関係は、南北人不婚、および南朝における南人北人という問題がからんでくるのである⁽²⁾が、このことはしばらくおき、いまここで検討中の問題に限定していえば、単にそれだけにとどまらず、累層的な通婚のありかたを暗示するものであるとおもわれる。たしかに、王謝はじめ、陳郡袁氏・蘭陵蕭氏ほか特定の北来諸族が、朱張顧陸を筆頭とする南土諸族に一段の政治的社会的優位をたもっていたことは事実であるが、すべての北来諸族が朱張以上であつたわけではない。いな、王謝に拮抗しえた朱張より、はるかに下位にあまじざるをえなかった北来諸族がすくなくなつたのである。このようにかかんがえると、王謝と朱張以下と表現された通婚上の格差ないし上下の階層関係は、王謝、およびそれらを中心とする北人一流諸族——柳芳のいわゆる王謝袁蕭——を筆頭とし、その下に朱張顧陸という南人一流諸族が位置し、その下もしくはそれらとならんで、王謝等以外の北人諸族、いわば次流諸氏族とでもいうべきものが位置するというようなものであつたことが推測されるのである。

そして、さらにその下には、こうした諸氏族からは類にあらずとしてその通婚から排除されるような、たとえば

富陽滿氏（「文選」）・臨海郡の劉瑱（「陳書」王元規伝）・侯景（「南史」侯景伝）といった諸族が存在するのである。

はしがきにも述べたように、このうちの最上層の通婚集団については、すでに従来から言及されることがすくなくないが、柳芳のいわゆる王謝袁蕭がその中心であったことはたしかであろう。たとえば「宋故散騎常侍護軍將軍臨澧侯劉使君墓志」によれば、この劉宋帝室の一員である劉襲の通婚相手は、琅邪王氏・廬江何氏・河南褚氏・蘭陵蕭氏・陳郡袁氏・濟陽江氏などに限定されてしまっている。これら南朝における上層諸氏族が最上層の排他的通婚集団を構成しているとみてよい。

朱張以下とされた諸氏族のうち、そのある部分が朱張顧陸を中心とする南人独自の通婚集団を構成し、北人諸族と一線を画していたこと、すなわち南北人不婚もまた周知の事実である。⁽¹³⁾ むろん、この通婚集団が、南人すべてを包含するものでなく、そのうちのかぎられた最上層部分からなっているというということまでもなからう。

さて、問題は、朱張以下のうち、北人でありながら王謝等最上層通婚集団から排除されている諸氏族である。そして、この点について想起すべきは前節での考証であきらかになった二大通婚集団と、とりわけ劉岱およびその姻戚を包含する通婚集団であることはもはやいうまでもなからう。これら劉岱の姻戚諸族が、王謝等諸族の構成する通婚集団と、非類とされる庶人層との中間にあつて、独自の通婚集団を構成しているということは、いまやうたがう余地もないであらう。

婚姻は、もともと露骨に社会的身分がそのすがたをあらわす行為のひとつである。それゆえ、右にみたような果

層的な通婚のありかたは、その当時の社会的身分のありかたをよくしめしているといえる。東莞劉氏およびその姻戚諸族が独自の社会的地位を共有していたことは、つぎのような事例によって明確となる。まず、東莞劉氏についていえば、「南齊書」^{卷三}劉祥伝に、

司徒褚淵入朝、以腰扇鄣日、祥從側過曰、作如此举止、羞面見人、扇鄣何益、淵曰、寒士不遜、祥曰、不能殺

袁劉、安得免寒士、

とあるように、東莞劉氏は河南褚氏から寒士と指斥されているし、「宋書」^{卷四}劉穆之伝に、

侍中何偃嘗案云、參伍時望、(劉)瑀大怒曰、我於時望、何參伍之有、遂与偃絶、

とあるのは、劉氏が世評では「時望」、すなわち第一流の士人・氏族のなかに参伍する——まぎれこんでいる——

とみられるような一族にすぎなかったことをしめしている。東海王氏については、「世説新語」^{卷六}讒險篇注引「晉安帝紀」に、王雅について、

雅之為侍中、孝武甚信而重之、王珣王恭特以地望見礼、至於親幸、莫及雅者、

とあるが、これは東海王氏が琅邪王氏(王珣)・太原王氏(王恭)より「地望」において、すなわち社会的地位において、一段ひくく位置づけられているということを暗示しているものとみることができよう。親幸とは、むしろ恩倖などというのにも似たニュアンスをもっているからである。高平檀氏についていえば、檀珪なるものが、当時吏部尚書であった琅邪の王僧虔に禄をもとめる書簡をおくったことが「南齊書」^{卷三}王僧虔伝にみえるが、その書簡で、檀珪は高平檀氏が劉宋帝室との連姻においては琅邪王氏に何ら遜色なく、また祖先の任官も王僧虔の祖先に

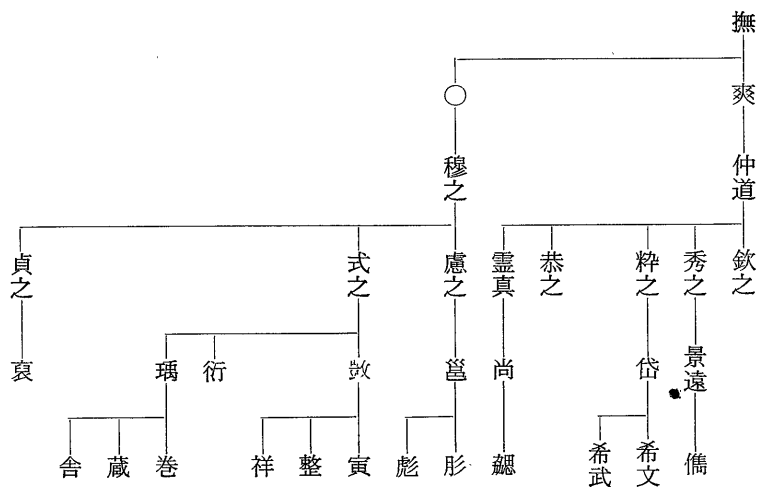
匹敵するものであるということを縣縣として訴えながら、

僕於尚書、人地本懸、至於婚宦、不至殊絶、

といっている。いかに劉宋帝室との連姻、あるいは任官状況が琅邪王氏に比肩しえても、人地、すなわちその社会的階層がはるかに懸絶していることは、みずからみとめざるをえなかったのである。また、東海徐氏の一員である徐勉が、吏部尚書にまでのぼりながら、梁武帝から「卿は寒士なり」と公言されている（「南史」^{十六}）ことも前節でふれた。

南朝にあつては、社会的身分は士庶に大別される。士階層の最上層部分は甲族とよばれ、寒士——甲族に対しては次門と称呼される——はかれらの下に位置し、士階層の最下層部分を構成するとともに、その下位に存在する庶階層とのあいだに、絶対的な優位を維持している。⁽¹⁶⁾かかる「甲族——寒士（次門）——庶」なる累層的社會身分構成は、右にみてきたような累層的なありかたで存在する通婚集団とのあいだに有機的な関連性をもっているといえる。すなわち、累層的通婚集団は社会的身分を契機として形成されているのであり、また、そのような通婚形態が累層的社會身分構成の維持存続におおなる役割をはたしているのである。

かくて、南朝の婚姻は身分的内婚制としての「士庶不婚」を大枠としつつ、さらに分化した通婚集団の階層的存在という特徴をそなえたものであったと断定することができるであらう。



四 婚姻と政治的身分

以上にみてきたような婚姻の階層的ありかたが南朝における政治体制といかに関連するのかわかるのが、つぎに検討すべき課題である。ここでは、東莞劉氏とその姻戚の官僚社会における位置を考証し、この課題にむけてのてがかりとしたい。

墓主劉岱は、東莞郡莒県の人である。墓誌銘によれば、その家系はつぎのようになる。

撫——爽——仲道——粹之——岱

ところで、東莞郡莒県の劉氏が歴史の舞台に登場するのは、それほどふるいことではなく、劉宋建国の最大の功臣であった劉穆之によつてはじめて脚光をあびるようになったといつてもよい。

「宋書」^{卷四十二}劉穆之伝によれば、かれらは漢の斉悼惠王肥の後裔であるといひ、劉穆之の家は、南渡ののち、代々京口に居住していたらしい。以後、正史の列伝に名をつらねるような人物が幾人かでてゐる。たとえば、岱の伯父にあたる劉秀之（「宋書」^{卷八十一}）

「文心雕龍」の撰者劉勰（「梁書」^{卷五}文学伝下）などはその代表的なものであるが、それらを系図でしめせば、前頁上段の図のようになる。

（「宋書」^{卷四}劉穆之伝、同^{卷八}劉秀之伝、「南齊書」^{卷三}劉祥伝、同^{卷四}徐孝嗣伝、「梁書」^{卷五}文学下劉勰伝、^{卷四}任彦昇奏彈劉整による）

本貫が東莞郡莒県とはいえ、劉穆之の家が京口に代々居住していたのと同様、かれ以外の族員も南渡後はそのほとんどが京口に居住していたらしい（「宋書」^{卷八}劉秀之伝）。京口は晋朝南渡の跡をおって渡江する北来士人たちの輻輳地のひとつであったから、東莞劉氏一族もその例にもれなかったのであろう。墓誌によれば、劉岱は丹陽郡句容県南郷廩里の竜窟山に埋葬されたことになっているが、あるいは京口（丹徒県）の南に隣接する句容県のこの地が京口に居住した東莞劉氏一族の墳墓の地であったのかもしれない。⁽¹⁸⁾

さて、この東莞劉氏の姻戚であるが、墓誌銘文にみえる趙淑媛・檀敬容・曹慧姬・任女暉といった婦人名は無論のこと、任仲章・任文季、また裴闔についても他所にはみいだせず、単に各氏族員であるということしかわからないので、官僚社会における位置の比較検討ということでは考察の材料が貧弱なうらみをのこしている。ところが、劉岱の長男希文の婦家についてだけ、かすかなてがかりがある。墓誌によれば、希文の婦茂英は東海王氏の出で、その祖父を王万喜という。ところで、「南齊書」^{卷三}王誡伝に、

王誡、字仲和、東海郷人也、祖万慶、員外常侍、父元閔、護軍司馬、⁽¹⁹⁾

とあって、この王万喜にきわめてにかよった王万慶という人物名をみいだすことができる。この二人は、つぎのよ

うな理由から、兄弟、もしくはすくなくとも同排行の同族人とみなすことができる。第一に、この当時の命名は兄弟に共通の字一字をもちい、いま一方の字にも何らかの共通性ないし関連性をもたせるという方法をとる場合がすくなくからずある。たとえば、墓誌銘の劉岱の二子が希文・希武であるような例である。⁽²⁰⁾そして、万喜・万慶は、万が共通、慶・喜は関連のある字であって、まさにその例である。第二に、両者がほぼ同時代——東晋末期——の人としても、おおきな矛盾が系図上にあらわれないことがたしかめられる。⁽²¹⁾

この万喜・万慶がかりに兄弟、あるいは同排行の同族人であるとして、かれらは東海王氏のなかでどのような位置にあるのか、そもそも東海王氏とはいかなる一族なのであろうか。

「南史」^{卷四}王誥伝には、

王誥、字仲和、東海郷人、晋少傅雅玄孫也、祖(万)慶、員外常侍、父元閔、護軍司馬、

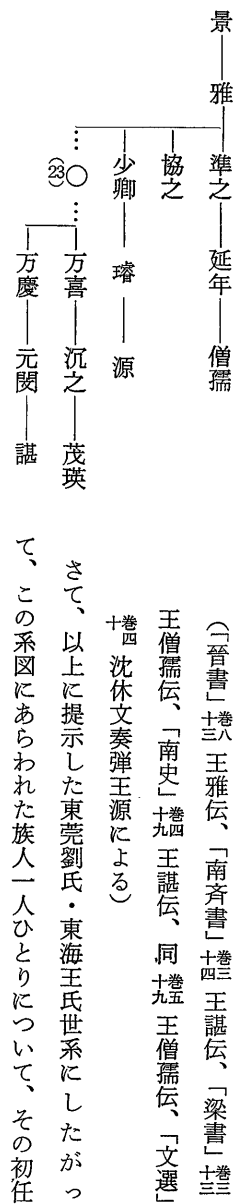
とあり、(万)慶が王雅の玄孫であるという。さきにもふれたが、王雅は東晋時代の人で、「晋書」^{卷八}に本伝がある。伝によれば、雅は魏の王肅の曾孫であり、東晋の孝武帝の礼遇をうけて、太子少傅にまでのぼった。ただし、それは前掲「世説新語」注引「晋安帝紀」に、

雅之為侍中、孝武甚信而重之、王王恭特以地望見礼、至於親幸、莫及雅者、

とあるように、門地・才能によるものではなかったようである。また本伝には時人は倭幸をもって雅を目したともいい、さほど高い社会的地位にあったのではなかったといってもよい。この王雅の出現によって著名となった東海王氏からは、このち譜学で後世に名をのこすことになった王僧孺(「梁書」^{卷三十三}王僧孺伝)などがでてくるが、何と

いっても東海王氏の名を史上にのこしたのは、すでにふれたように、「士庶不婚」の制をやぶって弾劾をうけた王源父子であろう。庶人かもしれないぬという氏族と通婚するという王源父子の行為から、その当時東海王氏のおかれていた社会的地位を感得することも可能である。

東海王氏世系はつぎのようになる。



官、主要経歴官、および最高到達官を、各世代ごとに表にしたものが、次頁以下にかかげる官職対照表である。

この表の検討から、以下のような諸点を指摘しうるであろう。

第一の点。独立した伝記をもつ人物がすくないので、初任・起家官についての記載も多数とはいえないが、奉朝請・府佐・国官などの官名がみえる。

第二の点。経歴官については、かなり顕著な一定の傾向をみとめうる。すなわち、尚書丞・郎、県令、郡守・相、中書・黄門郎、員外散騎常侍などがめだつておおい。そのほかに、公府從事中郎、司徒左長史、御史中丞、諸營校尉、刺史などがおもな経歴官としてみえてゐる。

〔表〕 劉氏・王氏官職対照表

＜劉氏＞					世代 官品
V	IV	III	II	I	
					1・2
		丹楊尹・右僕射	丹楊尹・左右僕射・常侍		3
越騎校尉	前軍將軍	刺史			4
國相 黃門郎	中書郎・內史 黃門郎・太守 員外常侍	太守	領太守	內史	5
令 公府從事中郎	太子中舍人	令	尚書祠部郎	令 尚書都官郎・	6
	公府參軍 太中大夫				7・8
		駙馬都尉・奉朝請	府主簿		初任官
景遠 岱 尚 邕 數	貞之 式之 慮之 粹之	秀之	穆之	爽	人名
宋 81 墓誌	宋 42 墓誌	宋 81 墓誌	宋 42 墓誌	宋 81 墓誌	典 拋

<王 氏>				
IV	III	II	VI	
	侍中	侍中・左衛將軍・丹楊尹・太子小傅・尚書・常侍		中護軍*
			步兵校尉 刺史	右衛將軍・刺史・中丞
員外常侍	員外常侍	散騎侍郎 黃門郎	虎賁中郎將・羽林監 內史	黃門郎・內史 太守 國相
		尚書左右丞 司徒左長史	令 公府從事中郎・參軍 尚書左丞	司徒左長史
			東宮舍人 中軍參軍 南徐州別駕**	
***		州主簿・郎中	○征西行參軍	○奉朝請
萬 珣 延年 慶 文 南史 40 59	少卿 協之 準之	雅	藏 卷 祥 整 寅 彪 颺	哀 瑀 衍
南齊 34	" " "	晉 83	宋 42 南齊 36 文選 40 南齊 4036	" " "

V		VI	
少府卿・吏部郎			
中丞			
中書郎・太守		中書郎・黃門郎・太守	
尚書儀曹郎・左丞・令		尚書殿中郎・左丞・令	
郡丞 護軍司馬			
○王國左常侍 ・太學博士		州迎主簿・從事	
僧孺 梁33		源 文選40	
元 南齊34		議	
		”	

注記1 世代欄のⅠⅤⅥは、劉撫・王景を基点とした世代数であり、両氏ではば対応するようにしてある（系図参照）。

2 常侍（散騎常侍）・員外常侍（員外散騎常侍）・中丞（御史中丞）・左右丞（尚書左丞右丞）・令（県令）は、それぞれ（一）内の略称である。

3 刺史は4品・員外常侍は5品・県令は6品にそれぞれ統一した。

4 若干の例外をのぞいて、將軍号は省略した。

5 初任官項の○印は、起家もしくは解褐と典拠に明記されていることをしめす。

注* 劉衍は晉安王子勛の乱に加担し、敗れて誅殺された（本伝）。この中護軍は晉安王から授けられたものである。

州官の官品は不明なものがおおい（官品のないものもある）。この南徐州別駕も官品不明であるので、とりあえずここに付記しておく。

*** 「文選」では「升采儲闈」というから、東宮官についてたことはたしかであるが、その具体的官名は確認しがたい。

第三の点。最高到達官については、数例をのぞいて、三品官まで昇進したものがみられない。とくに、三品官では特別な意味をもつ侍中が二例しかない。同時に、員外散騎常侍、中書・黃門郎、郡守・相、諸宮校尉、県令といったところが、この両氏族の大部分の最高到達官であることがたしかめられよう。

このような諸特徴をもつ劉氏・王氏両者の官僚身分は、当時の官僚社会にあっていかなる場所に位置づけられる

べきであろうか。このことを考察するために、当時の九品官制における、とりわけ右にとりあげた起家官・経歴官・最高到達官それぞれの特徴的な性格を、すでにあきらかにされているかぎりで、簡条的に簡述してみよう。⁽²⁴⁾

(一) 官位は二品の官と「不登二品」の官に大別され、ほぼ前者は士の、後者は寒門・庶人の就任官である。したがって、起家も、二品の官での起家と、「不登二品」の官よりの出身との二種となるが、二品の官での起家——これを門地二品という——も二大別され、秘書郎・著作佐郎起家という最高の起家と、それより劣位の奉朝請・太学博士・国官起家がある。

(二) 秘書郎・著作佐郎起家者は、太子舍人・洗馬、司徒主簿・掾属、王文学・友、秘書丞、中書・黄門郎、郡守、尚書吏部郎などを短期間に経歴し、侍中に到達して三品以上の官位のあいだを遊弋する。これが最高の官歴である。

(三) 奉朝請等起家者は、尚書丞・郎、散騎諸官（正員・通直・員外の常侍・侍郎）、県令、郡守、黄門郎などを経歴、それより昇進して四品官御史中丞、三品官散騎常侍にいたることがある。これは第二流の官歴である。

(四) 不登二品の起家であっても、奉朝請・員外散騎侍郎就任者は、奉朝請等起家のものとはおなじ官歴をあゆむことができるが、その場合は、県令、諸宮校尉、郡守が最高到達官となる。これも第二流の官歴としてよいが、右の第二流官歴より劣位である。

(五) それらの下に、いわば濁官官歴とも呼称すべき官歴がある。不登二品の官、たとえば国官などがここにふくまれる。それらはまさに庶人のあゆむべき官歴である。

このような当時の九品官制の特徴的構造をもとにしていえば、さきにのべた劉氏・王氏の就任官職にみられる諸特徴は、まさにかねらがこの第二流の官歴をたどる氏族であったことを明確にしめているのである。最高の官歴が、甲族とよばれる諸氏族、たとえば北来⁽²⁸⁾の王謝ほかの名門、あるいは吳郡張氏などに排他的に独占されていることも周知のことであるが、就任官職上の特徴からいえば、官僚社会において、劉氏・王氏はかれら甲族より一段ひくい地位をしめていたことが確認できるであらう。

このことを、いまいくつかの点から傍証しておこう。「通典」^{卷十}選舉四雜議論上に、梁の裴子野の論（「宋略選舉論」）をひき、

自晋以来、其流稍改、草沢高士、猶厠清塗、降及季年、專称閥閱、自是三公之子傲九棘之家、黄散之孫蔑令長之室、転令互爭銖兩、所論必門戸、所議莫賢能、

という。ここに言及されている三公（太尉・司徒・司空）、九棘（九卿のこと。ここでは中書監・令、尚書令・僕、侍中などをさす）、黄散（黄門侍郎、散騎常侍・侍郎）、令長（令は諸署令をもふくむ呼称だが、ここでは県令のこととみてよい）という諸官が、さきにふれた九品官制の固定的官歴におけるそれぞれの最高到達官と一致するのは偶然ではない。おそらくそれらは九品官制に内在する階層的秩序——それは具体的には官歴として表現される——をそれぞれ代表する諸官なのであり、それゆえ、そこに三公・九卿・黄散・令長をそれぞれ世襲する氏族の存在をうかがうことができるのである。そして、それらのうち、三公・九棘は第一流の、黄散・令長は第二流の官歴に相当し、かつ第二流にあたる黄散・令長のうち、前者は先述の黄門郎・散騎諸官に到達する官歴を、後者は令長まで

の官歴を象徴しているといつてよいであらう。そして、表でみるかぎり、劉氏・王氏はともに総じて黄散の家であり、高祖撫以下、本人まで内史・令・令・太守・令とつづく劉岱の家はまさに「令長の室」であると断言しうるのである。つぎに、劉氏の一員劉瑀について、「宋書」^{卷四十二}劉穆之伝に、

除司徒左長史、明年、遷御史中丞、……尋轉右衛將軍、瑀願為侍中、不得、

とある。御史中丞は、その職務ゆえに上流士人からは嫌忌され、甲族はこの官につかなかつたし、侍中は三品官就任者の初任官位であり、最高位諸官である尚書令・僕、中書監・令などへの出発点であつた。²⁶劉瑀が侍中に就任しえなかつたということは、かれがそのような上級官位就任者層から排除されるような存在であり、そのような氏族の出であつたことをしめしている。

ここで、さきに劉岱家の通婚相手として名のあがつた檀氏・任氏・裴氏それぞれの、官僚社会における位置について、若干のことを補足しておく。かれらのうち、南朝の正史に独立した列伝をもつものは、任氏が任昉のみであり、檀氏・裴氏も若干名をかぞえるにすぎない。しかしながら、そのかぎられた十余例にみるかぎり、この三氏の官職就任の状況は、劉氏・王氏のそれとまったく同一であり、官僚社会における中流官僚層の官職就任上の諸特徴を具備しているといえる。²⁷劉岱家の通婚相手である裴閬・檀敬容・任仲章・任文季・任女暉らがそれぞれ裴・檀・任各氏族のなかでいかなる位置にあるのかが不詳である以上、かるがるしく断定すべきではないが、かれらも劉氏・王氏と同様の官僚層に属する諸氏族の族員であつたということは留意されてよい。

ちなみに、さきにもふれたように、第二流官歴の下には、庶人のあゆむ濁官官歴ともよぶべき官歴があつた。

それは、そのほとんどが不登二品の諸官からなるものであるが、そこから昇進して員外散騎侍郎・中書舍人・給事中などにいたることもあった。「隋書」^{卷二}百官志上には、それら不登二品の諸官がいわゆる二品官とともに一括して列挙されているが、国官の大部分、および州郡県官・府官のうちの下級のものはこれにふくまれている——満氏父子の王国侍郎・吳郡正閤主簿を想起せよ——。そして、この濁官官歴は第一流および第二流官歴とのあいだにこえがたい落差をもっているものであり、このあいだの差別こそ、南朝に独自の現象である「士庶區別」の官僚体制における表現形態なのであった。

かくて、劉氏とその姻戚東海王氏、およびそのほかの姻戚諸族が、官僚社会にあつては、第一流官歴と濁官官歴の中間に位置するような官僚身分にあることがあきらかになったといえるであらう。

五 貴族制と社会的階層秩序

——むすびにかえて——

「劉岱墓志銘」にみえる通婚状況の検討によつて、およそつぎのようなことを確認しえた。

南朝の婚姻は、相互の通婚と不婚によつて構成されるいくつかの通婚集団が累層的に存在することをその一大特徴とするが、東莞劉氏およびその姻戚は、北来名族を中心とした最上位に位置する通婚集団と、士階層からは非類として通婚を拒否される庶人層との中間にある通婚集団を構成しているものとおもわれる。

このような通婚集団は、諸氏族の社会的身分を契機として構成され、それゆえかかる累層的な通婚集団のありか

たは、当時の社会的身分の累層的ありかたと密接な関連性をもっているとおもわれる。

劉岱および東莞劉氏は、その官僚体制内における官職就任状況からみて、最上層官僚層と最下層官僚層——すなわち庶人出身官僚層——の中間に位置する氏族であり、それは東海王氏をはじめ、劉岱家の姻戚諸氏族にもほぼ共通していえることである。

以上の諸点からは、必然的に、当時の諸氏族においては、通婚集団間での階層的関係における位置、すなわち階層的構成をとる社会身分上の地位と、官僚社会における階層的位置とが一致するという結論をみちびくことができる。

このような現象は、南朝における独自の政治的社会的構造、とりわけいわゆる貴族制との関連という視点からあらためて検討されねばならない問題である。

「士庶不婚」なる身分的内婚制が、士族ないし貴族の政治上・社会上の特権的地位を維持確保することをその目的とするものであったことは、すでに仁井田氏が明言されているところである。⁽²⁸⁾しかしながら、南朝における婚姻のありかたが、士庶という二大社会身分間における内婚制というにとどまらず、以上にみえてきたような特徴をそなえているということをかんがえれば、問題の考察には、なおあらたな視角が必要であり可能であるとおもわれる。

最上位にある通婚集団、すなわち最高の社会的身分をもつ諸氏族——甲族——が最上層官僚層を排他的に独占していることは、つとに周知の歴史的事実であり、社会的身分としての庶人層が政治的に、すなわち官僚社会においても士階層とは隔絶した待遇を余儀なくされている——いわゆる「士庶区別」——こともまた同様であるが、これ

らは貴族制のもっとも顕著な現象形態のひとつである。⁽²⁸⁾ところが、さらに以上のような「劉岱墓志銘」の検討から、かれらの中間にある社会的身分をもつ諸族が、最上層氏族と庶人層のあいだに位置するような独自の通婚集団を構成し、かつ、政治的には、すなわち官僚社会においては第二流に位置づけられるということが、あらたにたしかめられた。これは、まさしく社会的身分と政治的身分の緊密なる対応といつてよいであらう。

かつて岡崎文夫氏は、南朝の貴族制の内容を、「(一)南朝に於て若干の家族群は互に階級に分かれて居た。(二)階級的家族群と官僚組織に於ける位置との間に或種の関係を有して居た。(三)階級間には相互に階級意識を有して居た。(四)梁武帝の政治方針によって此制度は根本的に変化を与へられた。」という四点に集約された。⁽³⁰⁾この見解は、いわば六朝貴族制研究の原点とでもいふべき卓見であり、本稿で縷説したところもその大要はここ——とくに前三点——につきており、いささかなりとるところがあるとしても、それはこの見解のうらづけとなるべきより詳細な事例を提示しえたというところにとどまるであらう。ただ、若干付言しておきたいのは、岡崎氏のいうところの互に階級にわかれてゐる家族群なるものの歴史的な意味、および階級的家族群と官僚組織における位置とのあいだにあるというある種の関係なるものについてである。

通婚集団の形成は社会的身分を契機とするものであつて、政治的身分を契機とするものではない。このことは、これまでふれたもののうち、とりわけ通婚の拒絶の場合における双方の官位官職の上下関係を比較すれば、ただちに納得しうる。したがつて、同一通婚集団に結集する特定諸氏族がいかに同等の官僚社会中的地位を保持しようとも、それは同等の社会的身分、換言すれば同一の通婚集団に属するからそうなのであつて、その逆ではありえな

い。岡崎氏のいわゆるある種の関係とは、まさにこの意味でなければならない。社会的身分と政治的身分の緊密な対応が、単なる対応ではなく、前者が優性的に後者を規定するという関係にあること、これが第一に留意すべき点である。

ここであらためて問題となるのは、そのような社会的身分と支配体制との関連についてである。士・庶は本来社会的身分であるから、「士庶不婚」⁽³¹⁾は社会的慣行にとどまるはずであるのが、先述の「士庶不婚」原則の不履行に對する弾劾や、「資治通鑑」^{卷三}十九「宋紀武帝大明五年条に、

是歲詔、士族雜婚者、皆補將吏、

とあることなどによって、顕著な法制化傾向をもっていたことがあきらかである。また、やはり仁井田氏の指摘によれば、「玉海」^{卷五}十「芸文譜牒・唐編古命氏」の条に、

其末又載諸氏族譜一卷、云梁天監七年、中丞王僧孺所撰、俾士流、案此譜、乃通婚姻、

という興味ぶかい記事がある。⁽³²⁾ 晋南朝では譜字が盛行し、しばしば氏族譜編纂・改定がおこなわれたが、それら氏族譜は、単に諸氏族の世系にとどまらず、諸氏族間の等級づけをもしるしていたとおもわれる。したがって、当時の氏族譜は社会的階層秩序を表現するものであった。⁽³³⁾ それら諸氏族譜の集大成のひとつであったのが、梁武帝の命をうけた王僧孺の撰になる百家譜であったが、右にいう王僧孺の諸氏族譜とは、この百家譜とおそらく同一のものであったとおもわれる。そのような氏族譜をもとして通婚をおこなわせるといのは、「士庶不婚」の勵行だけでなく、その氏族譜上に表現された諸氏族の等級を是認するという志向の存在をしめすものであり、そのような志

向が現実化すれば、それは社会的階層秩序の固定・永続化を必然的にもたらしことになる。これは、まさしく社会的階層秩序を支配体制における基本的秩序原理とみなすことにはかならず、この一点において、南朝の皇帝権力と貴族制の歴史的特質をみることができるのであるが、⁽³⁵⁾「劉岱墓志銘」にみえる通婚関係記事こそはかような論点を暗黙のうちにものがたる貴重な史料といえることができるであろう。

(大阪市立大学文学部講師)

註

(1) 「南齊書」^{卷二}十六 王敬則伝、

(永明)三年、進号征東將軍、宋広州刺史王翼之子妾路氏剛暴、数殺婢、翼之子法明告敬則、敬則付山陰獄殺之、路氏家訴、為有司所奏、山陰令劉岱坐棄市刑、敬則入朝、上謂敬則曰、人命至重、是誰下意殺之、都不啓聞、敬則曰、是臣愚意、臣知何物科法、見背後有節、便言応得殺人、劉岱亦引罪、上乃赦之、

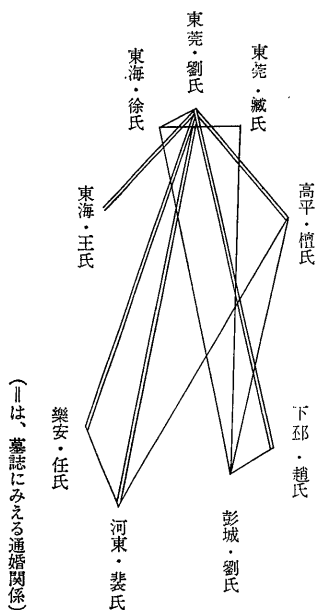
(2) 代表的な諸研究をあげておく。第一の論点については、王伊同『五朝門第』(一九四三、南京、守屋美都雄『六朝門閥の一研究』(一九五一)、周一良「南朝境内之各種人及政府对待之政策」(『魏晉南北朝史論集』一九六三、北京)、矢野主税「南朝における婚姻関係」(『社会科学論叢』二二二)、「張氏研究稿」(『社会科学論叢』五)以下一連の諸氏族研究など。第二の論点については、仁井田陞「六

朝および唐初の身分的内婚制」(『中国法制史研究』) 奴隸農奴法・家族村落法、一九六二。第三の論点については、岡崎文夫「南朝貴族制の起源、並に其成立に到りし迄の經過に就ての若干の考察」(『南北朝における社会経済制度』一九三五)、守屋美都雄「南人と北人」(『中国古代の家族と国家』一九六八)、越智重明「南朝の貴族と豪族」(『史淵』六九)、「東晉の貴族制と南北の地縁性」(『史学雑誌』六七七八)。

(3) 註(2) 参照。なお、矢野主税氏は、「南朝における婚姻関係」で、詳細に事例を提示・検討されたうえで、このような婚姻状態のなかにも、名族の傍系と寒人、名族と勲門・権門の婚姻というようないわば旧来の婚姻の原則をつきくずすような婚姻がおこなわれはじめていることに注意を喚起され、それは「現実政治的、社会的勢力をもっている一家と、伝統的、社会的地位をもっている一家と

の、相互利用的結合であった」とされている。

矢野氏の提示された事例は、本稿の論旨を否定するような可能性もつが、同時にそれは、氏のいわれる「相互利用的結合」、本稿における表現（第五節参照）というならば、社会的階層秩序を超越した稀有の成功例と理解することもできるのではなからうか。なお、皇帝家の婚姻については「補註」参照。



(4) 前者は劉承幹『希古樓金石萃編』^九卷 趙万里『魏晉南北朝墓志集釈』^一卷 (一九五六、北京) 所収。後者は陶宗儀『古刻叢鈔』所収。なお、前者については、馬衡『晉荀岳墓志跋』(『凡將齋金石叢稿』^五卷、一九七七、北京) を、後者については、朱希祖『六朝建康家墓碑誌考証』(『六朝陵墓調查報告』一九三五、南京) を、それぞれ参照。

(5) 裴氏については、矢野主税『裴氏研究』(『社会科学論叢』一四) を参照。

(6) 前掲矢野「南朝における婚姻関係」。

(7) これを図示すれば、上段の図のようになる。

(8) 拙稿『「士庶区別」小論』(『史学雑誌』八八一) 参照。

(9) 前掲仁井田「六朝および唐初の身分的内婚制」。

(10) 類という觀念は、『晉書』^{十四}卷八楊佺期伝に、

佺期沈勇果勁、而兄広及弟思平等皆強橫粗暴、自云、門戸承籍、江表莫比、有以其門地比王珣者、猶患恨、而時人以其晚過江、婚宦失類、每排抑之、

というように、とりわけ婚姻と任官の場合によく意識された。そして、それらは、「士庶区別」がもっとも顕著に現象する場であった(前掲拙稿参照)。

(11) この問題については、従来から幾多の言及がなされているので、参考文献の注記は省略する。

(12) この点については、小尾孟夫氏より貴重なご指摘をいただいた。ここにしるして、感謝の意をあらわしたい(付記を参照)。

(13) 註(2)の第三論点についての参考文献参照。

なお、この当時、婚姻に際しては氏族譜がとりわけ重視された(第五節)が、それら氏族譜の集大成として梁の王僧孺が撰した「百家譜」(第五節参照)では、「通典」^三食貨三郷党に、

僧孺為八十卷、東南諸族別為一部、不在百家之數、

とあり、「梁書」^{十三}王僧孺伝に、

僧孺集十八州譜七百一十卷、百家譜集十五卷、東南譜

集抄十卷、文集三十卷、

とあるように、東南(南人)諸族は中原諸族とはまったく別箇の、独自の氏族譜をもつものとされている。

(14) 越智重明「南朝の国家と社会」(岩波講座『世界歴史』

5、一九七〇)によれば、「寒土とは、次門として起家した士人のことである。」(傍点引用考)。

(15) 参伍については、「宋書」^{十四}恩倖徐爰伝に、

泰始三年詔曰、……太中大夫徐爰、拔迹廝猥、推所饒逢、遂官参時望、門伍豪族、

とあるような用法を想起すべきであろう。この詔は、庶人出身の徐爰が出身身分に不相応の官位についたことを指彈

しているのである。

(16) 前掲越智「南朝の国家と社会」参照。

(17) 東莞劉氏については、楊明照「梁書劉勰伝箋注」(「中華文史論叢」一九七九—)にも系図をふくむ言及がある。

(18) 劉岱の居住地と墓地については、筆者は「簡述」執筆者の見解に疑問をもっているが、ここではふれないことにする。

(19) 後掲のように、「南史」には、「祖慶」とあるが、これは「南史」の誤脱であるとみて、ここでは「南齊書」にしたがう。

(20) そのほか、偏旁冠脚に共通のものをもちいるというような方法もある。ともに事例は枚挙に遑ないので、例証をあげる繁はさける。

(21) 王万喜は、劉岱の子の妻の祖父にあたる。したがって、劉岱より一世代上の人物とみてよい。劉岱の生卒年は四三四〜四八七である(墓誌)から、その一世代上として、王万喜はおおまかな計算でゆけば、四〇〇年前後の出生とみてよいであろう。

王万慶は、王雅の孫で、王誡の祖父である。王雅の生卒年は三三四〜四〇〇(本伝)、王誡の生卒年は四二三〜四九一(本伝)。この間、四世代九〇年、単純計算して一世

代二三年とすれば、王万慶の生年は三八〇年となる。ただ、参考のためいえば、王雅の曾孫王僧孺の生卒年は四六五―五二二で、三代一三二二年であり、世代と年数の関係は、人命の長短、生子の早晚そのほかの要素で大いに左右されるものである。

ゆえに、王万喜と王万慶は、その推定生年が単純計算すれば四〇〇年前後と三八〇年頃とであって、一世代近い開きがあることになるが、世代・年数の特殊性からいえば、同世代とみても決定的な疑義は生じないであらう。

(22) 註(19)参照。

(23) 王雅には、準之・協之・少卿という三人の子があったという〔晉書〕本伝。そうであれば、万喜・万慶はこれら三人のうちいずれかの子になるはずであるが、それを確かめるすべはない。

(24) 以下、おもに宮崎市定『九品官人法の研究』(一九五六)による。また、官歴については、拙稿「南朝の九品官制における官位と官歴」〔史学雑誌〕八四―四を参照。なお、ここでは、本稿にいわゆる最高官歴・第二流官歴を、それぞれ高流官序・次流官序(I・II)と名づけている。

(25) 註(24)参照。

(26) 註(24)参照。

(27) 「宋書」^{卷四}檀道濟伝、同書^{卷四}檀超伝、同書^{卷四}檀祗伝、「南齊書」^{卷五}檀超伝、「南史」^{卷十}檀祿伝(以上、檀氏)、「梁書」^{卷十一}任昉伝(任氏)、「宋書」^{卷六}裴松之伝、「南齊書」^{卷五}裴昭明伝、「梁書」^{卷三}裴子野伝(以上、裴氏)をみよ。

(28) 仁井田前掲論文。

(29) 前掲拙稿「士庶区別」小論。

(30) 註(2)所掲岡崎論文。

(31) 註(29)拙稿。

(32) 前掲宮崎著書。

(33) 仁井田前掲論文。

(34) 註(29)拙稿。ただ、氏族譜が社会的階層秩序を表現するものであったという理解について、一言付言しておく必要があるかもしれない。氏族譜編纂者が純粹に社会的通念にしたがつて編纂した場合、それはそのままその社会的通念の反映したもの、すなわち社会的階層秩序を表現したものとなることは当然のなりゆきである。しかしながら、そこに、たとえば政策としての氏族譜編纂がおこなわれるといった、いわば皇帝権力の意志の介在があると、その氏族譜は完全に社会的階層秩序を表現するものとはいえなくなる。仁井田陸氏の「敦煌発見の天下姓望氏族譜」〔中国法

制史研究」奴隸農奴法・家族村落法」によれば、太宗の命による高士廉らの氏族志が太宗の意にみたなかった結果、「唐朝の官爵を基準に編集替えが命ぜられ」、皇帝を生んだ隴西李氏を第一位とした「貞觀氏族志」が成立したという。池田温氏は、「唐代の郡望表」(『東洋學報』四二—三四)で、この太宗の意図を、「伝統的な門閥評價の基準を現実の力関係に対応して新たにたてなおし、それによって新帝國秩序を強化せんとした」ものであるとされているが、実には確な意見であるとおもう。したがって、梁武帝の命をうけた王僧孺の手になる百家譜における諸氏族の等級が、皇帝権力による社会的秩序改編という傾向をながしかもっていたことは否定できないであらう。

しかしながら、太宗の命をうけた高士廉らの第一次「貞觀氏族志」がすでにそうであったように、社会通念上の旧来の社会的階層秩序はわかにはあらためがたいものであり、太宗ならいざしらず、南朝における皇帝権力と貴族制とのありかたを考慮すれば、王僧孺の百家譜には、右のような傾向はあったとしてもごくわずかなものであったろうことが推察される。ふたたび池田氏の適切な表現をかりれば、「氏族志の編纂は決して門閥そのものの否定を意味せず、却ってその適合的秩序付けを表示している」(前掲論文)のである。

(35) もちろん、このような社会的階層秩序を基軸とした婚姻を崩壊させようとする契機も存在する。そのひとつは、政治的権力(皇帝権力)である。

前掲「南史」江數伝に、

先是、中書舍人紀僧真幸於武帝、稍歷軍校、容表有士風、謂帝曰、臣小人、出自本県武吏、邀逢聖時、階榮至此、為兒昏得荀昭光女、即時無復所須、唯就陛下乞作士大夫、

とある。この、庶人出身の中書舍人である紀僧真と、おそらく潁川の名門であろう荀氏との婚姻などは、当時の中書舍人が強大な政治的権力を掌握する存在であったことをおもえば、政治的権力による社会的階層秩序を超越した通婚の成功例の一つであるといえよう。

なお、徐勉および檀道濟が通婚をもとめた名族がいずれも済陽江氏であったのは、偶然とばかりいえない興味ある事実である。宋・斉期になると、第二流官歴をあゆむ江氏が幾人かある(註(24)拙稿における次流官序の典型例)。それは、江氏の政治的身分の低下をしめすものとしてよい。政治的権力に依拠して名門甲族との通婚をはたそうとした徐勉や檀道濟にとっては、そのような江氏は恰好の攻撃目標であったろうし、逆に江氏にとってその通婚の許可はみずからの社会的身分の放棄に直結しかねない危険なもので

あったのである。この例は、社会的階層秩序と政治的權力とのかわりあいの問題について、ひとつの示唆をあたえるものといえる。〔補註〕参照。

いまひとつは、経済力である。それは、すでに本文中でみた東海王源父子と富陽滿氏、王元規と劉瓛の例がいずれもそうであるが、また、「太平広記」^{卷三百引}「搜神記」に、広陵盛道兒、元嘉十四年亡、託孤女於婦弟申翼之、服闋、翼之以其女嫁北鄉嚴齊息、寒門也、豐其礼路、始成、道兒忽室中怒曰、吾喘睡之氣、拳門戸以相託、如何昧利忘義、結婚微族、翼大惶愧、とあるようなものも、その例となろう。

〔補註〕 皇帝家の通婚。矢野氏は、「南朝における婚姻関係」で、きわめて詳細な宋・齊・梁・陳諸王朝の婚姻関係の検討をされ、かような通婚の傾向を宋・齊・梁朝にみとめ、「宋、齊、梁各王朝においては、従来の一流門閥との婚姻を中心とし、それに加うるに、王朝とともに成長して中央官僚家となった勳門との婚が多かった。」とされた。そのうち、一流門閥との通婚に、氏は皇帝家の門閥化志向をみておられるが、当をえた理解であるとおもわれる。表現をえれば、皇帝權力が既存の社会的階層秩序を是認しつつ、最高の政治權力（＝皇帝權力）に依拠して、その頂点

にたとうとした、とでもいえようか。

しかしながら、勳門との通婚について、これを王朝成立以前からの武人・寒門出身の股肱の臣が、王朝とともに成長して中央官僚家となり、その結果それらと皇帝家の通婚が成立するというように理解されている点については、別な考え方が可能ではないかとも思われる。つまり、武人・寒門との通婚は、かれらが王朝において中央官僚家として成長したからにはじまったのではなく、王朝成立以前からのものであったのであり、それは、純粹に社会的地位にもとづいたものであった。そして、王朝成立以後も、皇帝は門閥を筆頭とする社会的階層秩序を体制の前提としている以上、従来の社会的地位を完全に清算しきれず、それにもとづく通婚関係を維持せざるをえなかったのである、と。

こう理解することができるとすれば、それは、本来最高の政治權力に依拠して社会的階層秩序を克服しつつ新しい支配体制構築を志向するはずであるのに、なす旧来の体制秩序、すなわち社会的階層秩序中心の体制から脱皮できないという、南朝皇帝權力のおちいっていった矛盾をしめすものであり、そこにこそ、南朝皇帝支配体制の歴史的格があるといえる。

〔付記〕

本稿は、昭和五四年一月二七日の中国古代史研究会例会（於大阪市立大学）における報告「『劉岱墓志』について」をもとにしたものである。当日出席されて貴重なご意見をお

よせくださった小尾孟夫、佐藤武敏、白井平太、杉本憲司、布目潮風、の諸先生、および大阪大学大野仁、大阪市立大学末次信行・杉井一臣の各大学院生諸君に、末尾ながら感謝の意をあらわしておきたい。